

## いろいろなことを教えてくれる子どもたち (七)

村石京子

今月は、いろいろな生き物と子どもたちとのふれあいの中から、幾つかとりあげて書いてみたいと思います。

### ○蜂の巣のこと

暑かった長い夏も終わって、二期期がはじまりました。ところが子どもたちが元氣いっぱい庭を駆けまわる時期なのに、学期早々にちょっと困ったことがありました。

それは幼稚園のゆうぎ室のテラスのはり出した屋根の下に、すずめ蜂が巣をかけていたのです。蜂の数は三、四匹しき見当らず、そのせいか一学期末頃

に発見したときにはほんの小さなかたまりでしたが、夏の二ヶ月間に蜂たちはせっせとかべをぬりつけて、九月始まったときにはボール玉程になっていました。しかも、まだ巣は工事中らしく、蜂はしょっちゅう出入りしています。

時々蜂に見つからないようにそつと行って「蜂の巣、大きくなったわね。」と眺めたりしていました。が、勿論テラスではあそべませんし、庭にも蜂の飛びかう姿が見られてはうかうかしてられません。巣をこわすのは、せっかく家を作った蜂には気の毒だと思ふ気持と、一方にはどんなに見事に完成するか見たいという思いもありましたが、やはり幼児

をあずかる環境では危険が起こってはいけな  
いで、取りこわすことにしました。巣だけそつと残し  
ておきたいとも思いましたが、どうも無理なよう  
で取りこわしました。

「蜂の巣どうしたの？」 「蜂が追いかけてきて刺す  
といけなないので、こわしたの。」などという説明で、  
蜂がいなくなつてよかつたと安心する子どもと、せ  
つかく見ていたのにと、思う子どもとあつたよう  
ですが、幼稚園では安全管理を重視しなければなら  
ないということに落ちつきました。

ところが、取りこわして数日経つと何とまた同じ  
場所で家作りの作業がはじまつたのです。三匹位の  
蜂がうろうろしながら、以前の場所にはりついてい  
ます。「また蜂が来たの。お家がないっていつてい  
る。」また、作り出したみたい。」と、ちようどゆう  
ぎ室のテラスに一番近いところに保育室のあるせい  
か、代り代り興味をもつて、蜂のことを話にきま  
す。けれど一度巢をこわされた蜂は、以前よりずつ

と警戒心が強くなつたような感じで、低空飛行をし  
ながら時には保育室の窓から入つて来たりすること  
もあつて、「巢をこわしたから復讐に来るんだよ。」

今度はこわさない方がいいよ。」という五才児の声も  
ありましたが、あまり大きくならないうちに再度と  
りこわしました。そして、さすがにもう二度目に  
は、蜂の姿も見えなくなり、大人たちはホツとした  
ものです。

数日経つてある女の子が言いました。「おゆうぎ  
室のテラスのところは、みんなのあそび場だから駄  
目なのね。今度は、みんなのそばでないと、ころに立  
派なお家作るかもね。幼稚園でないところにつくれ  
ば大丈夫よね。蜂はもう遠くのお山まで行ったのだ  
といいわね。」と私に語りかけてくれました。その時  
は何か心のどこかに残つていたものを拭いさつても  
らつたような安堵感を覚えるとともに、四才児にな  
ると、「蜂、こわい、いやだ」などという感じ方ば  
かりでなく、このような受けとめ方が出来る子ども

もあるのだということを知り得た体験でもありません。

### ○目のわるい金魚

園の夫々の保育室では、金魚、めだか、どじょう、ざりがに、かめ、その他いろいろと飼育しています。そうした小さな飼育物に接するとき、よく傍へ行ってじっと眺めている子ども、えさをやるのが好きな子ども、ちよつとつついてみたくなったりする子どもと様々です。私の級でも、金魚やその他飼っていました。この夏の暑さのためか、一学期に飼っていた金魚は全滅してしまいました。

水槽の中で赤い金魚がゆらゆら泳いでいるのを見るのは、何となく優しくのどかになります。二期の始まる前に早速、近所の金魚屋さんに行って、新しい金魚を五匹買ってきて水槽の中へ入れておきました。一見以前と何のかわりもなく、金魚はゆっくりに泳いでいます。

三日ばかりたったある朝、T男が言いました。「ねえ、先生、あの金魚前のかわったの？」私はびっくりして聞きました。「エ、どうして？」「だって赤いところの模様が前のとちがうみたい。」私はT君のなみなみならぬ細かな観察力と、二ヶ月も以前のことなのによく覚えていてその記憶力に感心しながら、事情を説明しました。「毎日、お水をとりに来てあげればよかったね。」とT君の意見、全くもつともだと思いました。

次の日T男は朝登園すると、また金魚を眺めていました。「先生、一匹、目の見えないのがいるみたい。目が白いよ。」と言います。私はあれ、病気にでもなったのかしらと思いつつ、T男のいう金魚をよく見ると、確かに他の金魚より片方の目の黒目が小さくて、白っぽく見えるのがいます。言われるまで全く気づきませんでした。でもそれは、白赤のまだら模様がちょうど目のところと重なったために、そのように見えるようでもありますし、よくよく見ても

目が見えないのか、それとも模様なのか区別がつかせません。それでT男には私の感じたままを説明すると、「かあいそうだね。目が白くて。」と言いました。

この会話があつてから後、私はえさをやる時とか、水をかえるとき、いつもこの白い目の金魚がどうしているかしらと気になります。そして仲間たちにまじって元気にゆらゆら泳いでいるのを眺めては、嬉しくなるこの頃なのです。

### ○はとの死

連休の翌日、園庭を通過して山へ行く道にはとの死んだのが落ちていました。子どもたちの登園する前に仕末をしておけばよかったです、曲った小道のため気づかないでいました。「先生、大へん、鳥が死んでる。」「早く来て。」「気持わるい」。見つけた子どもたちは口々に呼びたてます。大いそぎで行ってみると、野良猫にでもやられたのか一羽のはと

が無残な姿になって、道に横たわっていました。

いつもはおっとり刀でかけつける元気な男の子たちも、さすがに手が出せずに見ています。そのままにしておくわけにもいかないので、大きなスコップを取って来ておそろおそろのせて、さあどうしたのか、用務員さんにでも応援をたのもうかしらと思つているところへ、「お墓つくって埋めてあげなくちゃかあいそうだよ。」というH夫の提案です。行き掛かり上、やむなく私ははとをのせたスコップをそうつと持って山へ行き、すみの方に埋めることにしました。金魚やおたまじやくしのお墓なら簡単にくれますが、鳩のお墓はかなり深くほって埋めなくてはなりません。私にとってはどうも難事業でしたが、ことの成り行きやいかにと、かたづをのんで見守る子どもたちの前では勇気をふるい起こさなけいわけにはいきません。やっと掘った穴の中へ埋めて、土をかけてやると遠まきにしていた子どもたちも安心したのか、葉っぱや小さな花などを夫々に摘

んでは、お墓にかざり、小さな手を合わせてナムナムと拝んでいます。もし、はとに魂があったら、きっとどんなにか喜んだことでしょう。

そして次の日のことです。H夫は私を「お山へ行きましよう。」と誘ってこう言いました。「昨日のとはのお墓のお花が枯れているかもしれないから、新しいお花ととりかえてあげましようね。」と。

### ○やもりの子ども

その他にも、いろいろな出来事が毎日のように織りなされていきます。ある日は、保育室の中で、小さなやもりを見つけました。エリマキトカゲでどかげ族は一躍勇名をはせたためか、見つけた男の子たちは「トカゲだ、トカゲだ」と喜んで部屋中を追いかけて、とうとうつかまえて首尾よく飼育箱に入れました。けれど数日すると、その小さなやもりは連休前には水分不足で細くなってしまいました。

子どもたちが帰ってしまった保育室で、私は一人しばし思案しましたが、やはり草のかげに放してやりました。

休み明けに空になった飼育箱に気づいたM男は「トカゲいないよ。どうしたの？」と聞くので、おなががすいたみたいなので、逃がしてあげたのよ」と話すと、「じゃあ、お母さんのところへ帰ったんだよ。よかったね。」と言ってくれました。

子どもたちと小さな生き物たちとのふれあい、まだまだいくらでもあります。そしてその中で子どもたちは、小さな生命の死を知っておどろいたり、あるときは新しい生命の誕生に感動したりしながら、そのふれあいを通して子どもたち自身優しさを育てています。そしてまた私にも、いろいろな暖かい心を伝えてくれる嬉しい折々となっています。

(お茶の水女子大附属幼稚園)